
狼は眼鏡の中に。

文樹妃

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

狼は眼鏡の中に。

【Nコード】

N1351E

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

眼鏡で隠された、彼の瞳は冷たく、無機質で 生徒と、教師と
いう壁を、あたしは一生乗り越えられないと思っていた。それなの
に、今、あたしは信じられない行動をしている。「キスしてください
い」「あたしの誘惑、先生はどうするんだろう。

狼は眼鏡の中に。

銀縁の、シンプルなフレームが、彼の輪郭に収まると、冷たい印象を与える。

どうしてなんだろう。まるで、その眼鏡の中で伏せられた、切れ長の瞳は、薄いレンズという膜で、守られているようにさえ見えた。「富永、次、二十三ページから」

必要最小限の言葉で指示されて、あたしは飛び上がるような気持ちを抑えて、なんとか冷静を装って立ち上がる。

そして始まるのは、授業という退屈で、変化のない、毎日の光景。それでも、あたしにとっては、唯一の、貴重な時間。彼を堂々と見つめられる、甘くて、苦い時間だった。

卒業を間近に、まだ授業以外で話をしたこともないけれど、こうして見つめている間だけは、彼があたしのものだど、夢見ることができる。

あたしと、彼を阻む壁は、果てしなく高く。きっと、この先越えられることはないだろうと、そう思っていた。

それで、満足していると、思っていたのだ。でも、自分が思っているよりも、あたしがもっと欲張りで、罪深い生き物だということを、知る時が来るのだった。

奇跡 そんな単語が頭に浮かんだ。同時に湧き上がってくるのは、奇妙な恐れ。

「で、俺に何をしてほしいわけ？」

目の前で、眼鏡越しに見つめられて、そんな台詞を吐かれているだなんて。信じられなかった。

それよりも信じられないのは、さっき自分が言った、ドラマ顔負けの台詞。

狼は眼鏡の中に。

『バレたら、大変ですよ』

まさかあたしがそんな脅しめいたことをするなんて。思いもしなかったというのに、心とは裏腹に、滑り出た、言葉。

『北原先生と、そんな関係だなんて、知らなかったなあ』

そう続けたあたしを、明らかに睨んできたのは、いつも教壇という邪魔な空間越しにしか、近づけなかった、遠い人物。

恋しくて、夢にまで見るほど、恋しくて　その想いを告げる勇氣すらなかったあたしが、今、何をしようというのか。

自分にもわからないあたしの本音を、覗き込もうとでもするかのように、彼が見つめてくる。

「そんな関係って、どんな関係だろうなあ。別に、何も噂になるようなことは、してないつもりだけど」

意地悪な瞳でそう呟く彼は、授業中の冷たい彼とは別人のようだった。『教師』という仮面を脱いだら、彼はこんな顔をしていたのだろうか。

「でっ、でも　昼休みの準備室で、ネクタイゆるめて、首元に…その、そんなものがつくような関係って、堂々と人に言える関係ですか？」

とても口に出しては言えなくて、あたしは彼の首元にはつきりをついた、赤い痣を遠慮がちに指差した。

「きつ、北原先生だって、あたしに見られて、あわてて立ち去って　十分に怪しいですよ！」

提出し忘れた授業のプリントを渡す、というあたしの名目は見事に崩れ去って、代わりにやっているのは、こんな情けない、脅迫。顔が赤くなっているのが、自分でもわかる。全然、脅しにもなっていない。

それでも後に引けなくて、あたしは必死で彼を睨みつけた。

「ふうん。そんなことはどんな風にも、言い訳ができることだけだね　まあ、いいや。大人しいと思ってた君が、そこまで言うんだ。」

狼は眼鏡の中に。

聞いてみてもいいよ。それで、俺にどうしてほしいの？」

最初の質問に戻って、彼はさりと訊ねた。昼休みはあと少しもうすぐ、授業に戻らなければいけない。

そんな理性は、息が感じられるほど近くで、見つめられたことで消えてしまった。

「キスしてください」

自分の言葉に、自分で驚いた。取り返しのつかないことを、口に行っている。そうわかっているのに、目の前で見開かれた、彼の瞳があまりに綺麗で　惹きつけられたまま、目を逸らすこともできなかった。

心臓が爆発しそうに脈打っている。きっと、あたしは真つ赤な顔をしている。震えそうになる足を、あたしは必死で床につなぎとめた。

驚きが通り過ぎたあとの、彼の瞳は、またいつもの表情を取り戻していた。いや、いつもの冷静さとは違う、挑発的ともいえるような、余裕にあふれた瞳。

「いいよ」

皮肉げにすら見える、甘い微笑みでそう返されて、あたしは目眩に襲われた。

今、何で、何で言ったの　？　混乱と、戸惑いと、緊張と、色々な思いがあたしの全身を駆け巡る。

そんなに簡単に、了承しちゃっていいの？　自分のとんでもない申し出はすっかり棚に上げて、あたしはパニックに陥っていた。

だって、まさか、そんな答えが返ってくるなんて、思いもしなかったから　。

声も出せないでいるあたしをよそに、彼はさつさと立ち上がり、準備室の唯一の窓に備え付けられたカーテンを引いている。

「あ、あの……」

埃っぽい空気が動いて、あたしは呪縛から醒めたように、ようやく声を出した。

「一応、人目があるからね。君だって、噂にでもなったら困るだろう?。」

何でもないことのように、そう言って、教材などが並べられた机を通り過ぎ、彼はあたしの目の前に立った。

「どういうキスがお望みな? リクエストによっては、お応えできるか分からないけどね。」

冗談めかしたように、あたしを見るその瞳は どうしようもなく魅力的で、あたしなんかの手に負える相手じゃないことは、すぐにわかる。

いや、ずっと前からわかってたのかも知れない。だからこそ、無機質なその眼鏡で隠された、彼のこんな表情が、ずっとあたしは見たかったのだ。

矛盾した自分の気持ちをなんとか隠して、あたしは覚悟を決めた。そう、これはあたしの最初で最後のチャンス 絶対に、逃してたまるものか。

「あなたが、いつも恋人にしているように いいえ、今までしたことがないような、そんなキスを。」

瞳を閉じて、あたしは言い切った。彼の余裕を、少しでも崩せればいい。一瞬だけでいいから、本気の彼を、見せてほしかった。

再び開いた瞳に映るのは、彼の見たことがない、顔。大人の男の、ときどきするような、瞳。

「 わかった。後悔、するなよ?。」

カチャリ、と彼が外した眼鏡が、そばの机に置かれた音が聞こえた。

初めて見る、レンズ越しじゃない、彼の瞳。不思議なほどに優しく、少し熱いようにも見えた。

頷いたあたしの頬に触れた、彼の手 大きくて、温かな手の平にそっと導かれる。

昼間だというのに、少し薄暗い準備室。その空間が、二人だけの密室に変わった。

狼は眼鏡の中に。

キスというものさえ、したことがないあたしにとって、未知の経験 それは少し怖くて、それ以上に甘い、逆らえない誘惑だった。唇が触れ合った途端、息苦しいほどに、彼があたしを抱きしめた。「ん……っ」

今までの余裕が嘘のように、激しくて、熱い、彼のキス。唇から、全てを奪い取るうとでもするかのように、舌を絡ませ、何度も角度と深さを変えて、あたしを侵略する。合間に聞こえる、彼の吐息は、まるでこの瞬間を待っていたかのような、熱を帯びたもので。目眩と、痺れのような、甘い感覚が、あたしをすっかり骨抜きにした。

永遠のように続くかと思われた、秘密の行為は、夢つつのうちに、終わった。

そして、囁かれた言葉に、あたしはその一瞬が、夢でないことを知るのだ。

「まったく 卒業まで、なんとか耐えようとしてたのに」
人の気遣いを、無駄にしゃがって、と。確かに彼はそう呟いた。

お前が誘惑するから、悪いんだぞ 囁きは、確かにあたしの耳に届く。

それでもその瞳は、どこか嬉しそうなもので あたしは、今度こそ、何が起こっているのか、理解できずに、限界寸前の意識を、手放しかけるのだった。

それから始まった、あたしと彼の内緒の関係は、この時のキスよりも、もっと口に出しては言えない状況になっていて。

卒業を控えたあたしは、もう内心どきどきだ。

そんなあたしの心なんて、露知らずというべきか、知っていて苛めているというか、彼がひどく、意地悪な奴だということを、あたしは思い知った。

狼は眼鏡の中に。

授業中でも、休み時間でも、目が合ったら送られる
意味ありげな、視線。

周囲に気づかれないかとヒヤヒヤするあたしを横目に、あっさり
とまた、『教師』の仮面を被る彼。

そして、今日もまた、眼鏡で隠された、彼の瞳に怯える一日が始
まるのだ。

信じられないくらい、幸せな一日が。

(後書き)

この作品は、青蛙さまのブログで開催される「眼鏡フェスタ」の参加作品です。

眼鏡男子愛好家の皆さんのため、本当に思いつくがままに書いた、このお話ですが、感想等いただければ、すごく嬉しいです。

「眼鏡フェスタ」に興味がおありの方は、ぜひ青蛙さまのブログへ！
他の方の素敵イラスト、SSが掲載予定です！

<http://aogae.ru-1114.at.webry.info/>

狼は眼鏡の中に。

狼は眼鏡の中に。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351e/>

狼は眼鏡の中に。

2009年3月24日09時18分発行